

## ➤ ラッキースワイネス(LUCKY SWEYNESSE、漢字表記:金鑽貴人) = 香港

せん 7 歳・青鹿毛(ニュージーランド産・2018 年 10 月 17 日生まれ)

父:Sweynesse = 母:Madonna Mia(母の父:Red Clubs)

馬 主 : ミンリョン・チェン、ユートン・チェン、メイメイ・チェン、ユーワイ・チェン

調教師 : カーリョン・マン

騎 手 : カーチュン・リョン

戦 績 : 全 27 戦 16 勝、2 着 5 回、3 着 1 回

総獲得賞金 : 約 15 億 3,160 万円

主な戦績 : '23 香港スプリント(G1) 1 着  
'23 チェアマンズスプリントプライズ(G1) 1 着  
'23 クイーンズシルバージュビリーカップ(G1) 1 着  
'23 センテナリースプリントカップ(G1) 1 着  
'23&'24 香スプリントカップ(G2) 1 着  
'22&'23 香ジョッキークラブスプリント(G2) 1 着  
'23 シャティンヴァーズ(G3) 1 着  
'23 チャイニーズクラブチャレンジカップ(G3) 1 着

今年のスプリンターズステークスで初の海外遠征に挑むラッキースワイネスはニュージーランドで生産された青鹿毛馬です。父スワイネス(その父ロンロ)は現役時にオーストラリアにおいて芝 1,400m~1,800m で 4 勝(うち G3・2 勝)を挙げ、マイル G1 のランドウィックギニーで 2 着。ラッキースワイネス以外の産駒にオーストラリアの G2 ザローゼズ(芝 2,000m)を勝ったオンリーワーズなどがいます。母マドンナミア(父レッドクラブス)はニュージーランドの芝 1,100m~2,100m でリステッド競走を含む 9 勝で、ラッキースワイネスの全姉に G1 クイーンズランドオークス(芝 2,200m)3 着馬のシニョーラネラ。また、母系からは G1 ウィリアムレイドステークス優勝のラップアラウンドのほか、ブルーダイヤモンドステークス 2 着のローズオブデインヒルやヴィクトリアダービー3 着のノゾミなどが出しています。

ラッキースワイネスは 2020 年のトレーニングセールにおいて J&I ブラッドストックに 90,000 ニュージーランドドル(当時約 660 万円)で落札されると、翌年にバリアトライアルを 2 戦(6 着、1 着)してから香港に運ばれて、カーリョン・マン厩舎の所属馬となりました。デビューは 3 歳シーズンの 2022 年 2 月で、7 月までに芝の 1,200m~1,400m を 7 戦して 5 勝。この 2021/2022 年シーズンの年度表彰では、香港で競走馬のキャリアをスタートさせた 2 歳馬または 3 歳馬の中で最も活躍した馬に贈られる最優秀グリフィンに輝きました。

4 歳の 2022/2023 年シーズンに入り、初戦となった 9 月のクラス 1 ハンデ(シャティン、芝

1,200m)を完勝すると、重賞戦線を歩みます。ザカリー・パートン騎手とのコンビで臨んだ10月のプレミアボウル(シャティン、G2、芝1,200m)はG1馬ウェリントンにかわされて2着でしたが、続く11月の香ジョッキークラブスプリント(同)では7番手から直線で手応え良く伸びて、クビ差ながら初の重賞タイトルを飾りました。堂々の一番人気で迎えた12月の香港スプリント(シャティン、G1、芝1,200m)は内で包まれたままの6着で不完全燃焼に終わりましたが、年明けのチャイニーズクラブチャレンジカップ(同、G3、芝1,400m)をトップハンデで快勝すると、ここから連勝街道を進みます。

香港スピードシリーズ初戦となる2月のセンテナリースプリントカップ(シャティン、G1、芝1,200m)は、2番手から残り150mで先頭に立ち、ウェリントンの追撃を1馬身半かわしてG1初勝利を挙げ、翌月の同シリーズ2戦目、クイーンズシルバージュビリーカップ(シャティン、G1、芝1,400m)ではジェームズ・マクドナルド騎手に替わり、逃げたカリフォルニアスパングルを2番手から残り150mでとらえると、最後は1馬身1/4の差をつけてG1連勝。パートン騎手に戻って4月の香スプリントカップ(シャティン、G2、芝1,200m)でも貴録勝ちを見せると、3週後に同じ舞台で行われたチェアマンズスプリントプライズ(G1)でも2番手から余裕の手応えで早め先頭に立ち、サイレントウィットネス以来史上4頭目の香港スピードシリーズ完全制覇を達成しました。続く6月のシャティンヴァーズ(G3、芝1,200m)でも他馬より4.5kg以上重いハンデをものともせず、6連勝でシーズンを締めくくって年度表彰では最優秀4歳馬と最優秀スプリンターに選出。この2022/2023年に挙げた8勝(10戦)は、ビューティージェネレーションと並ぶシーズン最多勝利記録となりました。

2023/2024年の5歳シーズンは、9月のクラス1ハンデ、10月のプレミアボウルともにトップハンデもあって2着と取りこぼしましたが、香ジョッキークラブスプリントでは逃げたビクターザウィナーをクビ差かわして優勝。次いで断然の支持を受けた香港スプリントは、内の4番手から直線に入って進路が塞がる場面もありましたが、残り300mで外に持ち出されてからは鋭く伸びて、前年の雪辱を果たす4つ目のG1タイトル戴冠となりました。2023年のワールドベストレースホースランキングでは、レーティング125で世界8位タイ、芝のスプリント部門ではトップの評価を受けています。

ところが、2024年を迎えて、センテナリースプリントカップは二の足がつかず後方からとなって6着まで。続くクイーンズシルバージュビリーカップは前年同様にマクドナルド騎手を鞍上に迎え、序盤は中団に位置取ったものの他馬に寄られてポジションを下げ、直線では大外から前に迫りましたが、今一つ伸びを欠いて1馬身半差の5着でレースを終えました。ヒュー・ボウマン騎手との初コンビとなった4月の香スプリントカップも後方からとなりましたが、ここは上がり最速でインビンシブルセージ(この後チェアマンズスプリントプライズ優勝)を半馬身振り落として3戦ぶりの勝利を挙げ、復権に向けて視界が晴れたかに見えました。

しかし、レース翌日に跛行が見られて検査をしたところ、左第3中手骨を骨折していることが判明して、シーズン途中で戦線離脱を強いられることに。8月から調教を再開して、翌月末からは追い切りも開始しましたが、10月の段階で陣営は時期尚早として香港スプリントでの復帰を断念。結局、前走から1年以上経った今年4月のチェアマンズスプリントプライズ(3番人気)でようやく実戦に戻りましたが、後方からジリジリと伸びて、勝ったカーインライジングからは6馬身半差、日本のルガル(5着)

からは半馬身遅れた 6 着で入線しました。続くシャティンヴァーズ(5 番人気)はトップハンドの 61kg を背負って後方から差を詰めますが、3 馬身差の 4 着でレースを終えています。

昨シーズン後は従化競馬場での軽い調整を経て、7 月末にシャティンに戻って追い切りを重ねると、8 月下旬のバリアトライアル(オールウェザー1,200m)ではリヨン騎手が騎乗して、69 秒 29(4F: 44.9 - 2F: 22.7)のタイムで先頭でフィニッシュ。こうして迎えた新たな 2025/2026 年シーズン初戦、9 月 7 日のクラス 1 ハンデは前走に続いてリヨン騎手を背に単勝 29 倍の 3 番人気での出走となり、7 番手から 33 秒 55 の末脚を繰り出し、先に抜け出したカーインライジングには 2 馬身 1/4 の差をつけられたものの、同馬(負担重量 61kg)に次ぐ 2 番目のハンデ(57kg)を背負いながらしっかりと 2 着を確保しました。

ラッキースワイネスはここまでの 27 戦全てで右回りのレースに出走して、G1 と G2 各 4 勝、G3・2 勝を含む 16 勝。稍重で 3 戦して 1 勝、2 着 1 回、3 着 1 回がある以外は良馬場でのレースで、重・不良馬場の経験はありません。芝の 1,200m では 23 戦 13 勝、2 着 5 回、3 着 1 回、持ち時計は 2022 年 11 月の香ジョッキークラブスプリント優勝時の 1 分 7 秒 55(シャティン、良馬場)。なお、シャティンの芝 1,200m のコースレコードは今年 1 月にカーインライジングが記録した 1 分 7 秒 20 です。現時点の香港ジョッキークラブによるレーティングは 125 で、カーインライジング(137)、ロマンチックウォリアー、ヴォイッジバブル(ともに 134)に次ぐ数字となっています。

- **馬主:ミンリヨン・チェン、ユートン・チェン、メイメイ・チェン、ユーワイ・チェン**

**(Cheng Ming Leung, Cheng Yu Tung, Cheng Mei Mei & Cheng Yu Wai**

**/ 漢字表記:鄭明亮、鄭裕彤、鄭美美與鄭裕偉)**

ラッキースワイネスはミンリヨン・チェン氏と、その子供であるユートン・チェン氏、メイメイ・チェン氏、ユーワイ・チェン氏の 4 名による共有馬です。父ミンリヨン・チェン氏は貿易業に携わっており、1990 年頃からマカオで競走馬を所有して 60 勝以上を挙げ、当地の馬主協会の会長職も務めました。香港では当初、共有組織で競走馬を所有していましたが、2013 年からは家族名義で所有するようになります。現在、4 人の名義で所有している馬は、ラッキースワイネスの他にラッキーフィールドとラッキーステートメントの 4 歳馬 2 頭がいます。

- **調教師:カーリヨン・マン(“Manfred” Ka Leung Man / 漢字表記:文家良)**

1957 年 7 月 18 日生まれ。香港の新界西部にある元朗で育ち、家庭が貧しかったため香港ジョッキークラブで職を探し、ジョージ・ムーア厩舎で攻馬手となります。すると、同師の計らいでジョッキークラブの競馬学校への入学が叶い(キンワイ・ルイ調教師らと同期)、1976 年に騎手デビューを果たします。1978/1979 年シーズンに見習リーディングに輝き、1979 年のクイーンエリザベス II 世カップをゴーゲッターで優勝。1982/1983 年シーズンで騎手を引退すると、最初はジョージ・ムーア厩舎、

そしてその後を継いだジョン・ムーア厩舎で攻馬手、アシスタントトレーナーを務め、2001 年に調教師ライセンスを取得しました。

ここまでのリーディング最高位は 43 勝を挙げた 2009/2010 年シーズンの 5 位で、本馬以外の主な管理馬に 2012 年、2013 年にセンテナリースプリントカップを連覇したイーグルレジメント、2015 年ジャン્યアリーカップ勝馬プレジャーゲインズ、2023 年レディースパース優勝のエンカウンタードなどがいます。2024/2025 年シーズンは 410 戦 45 勝でリーディング 8 位となり、調教師としての香港通算勝利数は 700 に迫っています。

日本での管理馬出走は今回のスプリンターズステークスが初めてですが、2013 年にはイーグルレジメントでドバイのアルクオーツスプリントに挑み 3 着でした。先日のコリアスプリント(G3)をセルフインブルーヴメントで制し、2016 年のスーパージョッキーズ以来となる香港調教馬による同レース優勝となりました。

#### ● 騎手:カーチュン・リョン(“Derek” Ka Chun Leung / 漢字表記:梁家俊)

1988 年 7 月 30 日生まれ。双子の兄弟であるカワイは香港で見習騎手となり、昨年廃止となったマカオ競馬で騎手をしていました。カーチュン自身は香港ジョッキークラブの騎手学校を卒業後、ニュージーランドに渡ってランス・オサリバン調教師のもとで研鑽を積みます。その後、ポール・オサリバン厩舎所属の見習騎手として 2008/2009 年シーズンから香港で騎乗を開始。2010 年には国際見習騎手招待シリーズのアジアヤングガンズチャレンジで優勝するなど、順調なキャリアを歩みました。

2016/2017、2017/2018 年シーズンには地元出身の最多勝騎手に贈られるトニー・クルーズ賞を受賞するなど、ここ数年はリーディング上位の常連として活躍し、2021/2022 年シーズンは自己最高の 48 勝でリーディング 7 位、2022/2023 年は 36 勝で 8 位、2023/2024 年は 489 戦 25 勝で 14 位。前シーズンの 2024/2025 年は 447 戦 36 勝で 8 位となりましたが、3 着の回数で上回ったミンファイ・プーン騎手が 7 位となって、地元出身で最高の成績を収めた騎手に贈られるトニー・クルーズ賞を惜しくも逃しました。香港での通算勝利数は 500 に迫っています。

ここまでの主な勝鞍に、2017 年香港マイル(ビューティージェネレーション)、2024 年センテナリースプリントカップ(ビクターザウィナー)と 2 つの G1 があるほか、そのほかの重賞では 2009 年プレミアボウル(インスピレーション)、2016 年ジャン્યアリーカップ(フレイムヒーロー)、2017 年シャティントロフィー、セレブレイションカップ(ともにビューティージェネレーション)、2019 年香港クラシックカップ(ミッションタイクーン)、2020 年プレミアボウル(ウィッシュフルシンカー)、2021 年ジョッキークラブカップ(リライアブルチーム)、2023 年レディースパース(エンカウンタード)を制しています。

日本での騎乗は昨年の高松宮記念(ビクターザウィナーで 3 着)以来で、その際のエキストラ騎乗も含めて JRA 通算は 4 戦 0 勝。このほか、武者修行先のニュージーランドをはじめ、オーストラリア、マカオ、シンガポール、アラブ首長国連邦、フランス、英国、韓国で騎乗歴があります。